

咸興での少年期

宮城県 清原 昌雄

一 戦前の生活

昭和十三（一九三八）年四月、咸鏡南道咸州郡徳山面徳山里にあった、朝鮮人学校の徳山尋常小學校に私は入学した。その学校の日本人生徒は、兄と私のたった二人だけであった。それというのも、父がこの学校の校長をしていたからである。

学校は、道庁のある咸興府からバスで約一時間ぐらい離れた所にあった。

初めてこの学校に行ったのは入学式の日であったが、朝鮮の民族衣装であるチマ・チョゴリを着て登校してきた級友となる新入生たちは、先生から朝鮮語で名前を呼ばれていた。小学校に入る前から、私は朝鮮人の子供たちとは片言の朝鮮語を交わしながら、隠れん坊や石蹴りや戦争ごっこなどをして遊んでいたので、あまり抵抗らしいもの

も感じることなく、それが普通の状態と思っていた。

一年生の担任は、朴吉鎬という朝鮮人の若い先生だった。国語の時間には、日本の文部省検定の小学国語読本が教科書で、朝鮮人生徒も一緒に「サイタ、サイタ、サクラガサイタ」を声を出して読むと、先生が朝鮮語で解説しながら教えた。

朝鮮語の時間もあつたが、週に一時間しかなく、しかも国語の時間とは言わなかった。確か、その時間は朝鮮文字（ハングル）を習字として書いていたように記憶している。

二年生になると、日本人教師の長岡武彦先生が担任となった。長岡先生は、広島の師範学校を卒業してこの学校に赴任したばかりで、朝鮮語が話せるわけがなかった。しかし朝鮮人生徒は、長岡先生に教えられて日本語を十分に理解するだけの力が身につけてきていたようだった。

昭和十二年にぼつ発した日中戦争は、日本政府の不拡大方針にもかかわらず拡大する一方で、朝

鮮総督府からも「内鮮一体化」という国是が打ち

たてられ、その方針に基づいて「皇民化政策」が強力に推進された。その趣旨は、朝鮮人に対しても皇国臣民としての本分に徹するということで、そのために教育面においても、小学校一年生から日本語での教育が主体となり、必然日本語の教科書が使われたのである。

十月には、「皇国臣民への誓詞」が作られて、小學校においても毎日、朝礼時に宮城遙拝のあとに、全員で声高らかに朗誦させられたものだった。

- 一、私共は、大日本帝国の臣民であります
- 一、私共は、心を合わせ天皇陛下に忠義をつくします
- 一、私共は、忍苦・鍛錬して立派な強い国民になります

という内容であつたと思う。だが、この朗誦においても、これに抵抗して口をつぐみ、唱えなかつた朝鮮人の上級生がいて、それを見とがめられて全校生徒の前で先生からひどい制裁を受けてい

るのを見たことがあつた。

私が三年生になった年に、父が咸興府の郊外にあったやはり同じ朝鮮人学校の沛東小學校（ペイドン）に転勤になった。父は、私を府内にある日本人小學校の咸興小學校に転校させた。初めて日本人の子供たちの仲間に入ったが、それまで日本人の子供たちと遊んだ経験がなかったので、いろいろと戸惑うことが多かった。

まず一番先に驚いたことは、校舎だった。それは、今までの徳山小學校の校舎は六学級が詰め込まれた木造のおんぼろ建物だったが、咸興小學校は各学年は四クラスでさらに高等科もあつたし、建物は赤煉瓦造りの三階建てで、その上今まで見たこともないような立派な講堂、理科教室、図工作業室もあつたことだった。それに御真影を安置する奉安殿もあり、電気、水道などの生活設備も整っていた。

こんな立派な学校に転校した私は、気も動転する思いがしばらく続いた。現代語で表現すれば、

まさにカルチャーショックということだろう。

それに、今までは校長先生の子供ということ、また日本人の子供ということから、物珍しさが加わって生徒全員から特別の扱いをされてきたし、私自身もそのような思いがあったが、今度の学校に移るやすぐに級友から「どこからきたの？」と問われるままに、何気なく「朝鮮人学校から」と答えると、それまでの関心の顔から一転して軽蔑の顔に変わっていった。それが、そのうちに虐めの対象となっていくたのが、今でも深い傷跡として心の奥に焼き付けられている。

昭和十五年になると、朝鮮総督府による皇民化政策の一環として、創氏改名が行なわれた。金さんは「金田」とか「金原」とか、日本式に姓を変えた。林^{リン}さんはそのままに字を変えず「林^{はやし}」と読み方を変えただけの人もいたが、当時、比較的に多い姓に韓さんというのがあり、それがこともあろうに「清原」と改姓した。父の話によると、「韓氏発祥の地は、忠清南道清州であるので、その清

官吏にも、学校教師にもなることができなかった。

学校では、毎月の「興亜奉公日」には全校生徒が咸興神社に参拝して、戦勝祈願をしていた。朝鮮人学校も同様に強制的に参拝させられていたが、その中でキリスト教徒の子供が参拝を拒否して問題になったことを、担任の先生が話されたことがあった。

父が勤務していた沛東小学校の周辺は、一面のりんご畑であった。それはそれは見事な果樹園地域で、活気が^{みなぎ}漲っていた。二月ごろになると、朝鮮人の家庭からりんごが木箱で届けられた。あちこちからもらうので、我が家の中はりんごで埋まり、甘酸っぱい芳香で満ちていた。母はその家々にせつせとお返しをしていたようだった。今考えてみると、その当時は朝鮮人の子供には義務教育が施行されていなかったのではないかと思う。だから一応生活が安定している朝鮮人の家では、子供に教育をさせるため小学校への入学を望んでいて、簡単ではあったろうが入学試験のようなも

をとって清原と名乗ったのだろう」ということであつた。

だが私にとっては大変な衝撃であつた。虐めの対象になつているので、級友はもとより上級生までが、寄つてたかつて私に対して「お前は朝鮮人だろう！」とか、「この学校から出ていけ！」とかの罵詈雑言を浴びせられるいやがらせを受けたものだった。私は幼いながらも、生まれたときから付けられている姓を変えるなんて、おかしいことをするものだ。姓を変えたからといっても、朝鮮人が日本人になれるのかなあと、一人で考え続けていたことを今でも覚えていてる。

やがて歴史を習うようになって、前九年の役において源頼義・義家の軍勢に出羽の清原氏が加わつて、奥州を制していた安倍一族を滅ぼしたという史実を知り、ようやく悪友たちからも日本人であると認められたようだった。

創氏改名に従わなかつた朝鮮人は、日本への渡航はもとより、当時の朝鮮人の出世の道であつた

のもあつて、それに合格することを願つて、りんごを持って来たのではないかと想像する。現在の裏口入学のはしりのようなことだろう。

一方、私は咸興小学校で三年生から六年生までの間学んだ。学校へは主として自転車通学だった。徳山里にいたときとは異なり、子供たちは日本人小学校と朝鮮小学校とに完全に分けられていたので、日常の交流は全くなく、咸興で朝鮮人の子供たちと仲良く遊んだ記憶は全然ない。それどころか、学校の行き帰りに集団で朝鮮人の小学生を見ると、悪口雑言を浴びせて喧嘩を売ったりしたものだ。私たちの心の中でも朝鮮人を軽蔑する気持ちが強くあつたと思う。軽蔑された朝鮮人の子供たちも、黙つてはいなかった。自尊心の強い彼らは、それを傷つけられたことに憤慨して、集団で私たちに襲いかかってきた。「朝鮮人、朝鮮人と馬鹿にするな！ 同じ米を食らつていて、どこが違うのか！」という言葉を投げつけていた。この言葉は後々までよく耳にしたものだ。差別に対

する彼らの怒りを、端的に表現している言葉だと思う。

一人で歩いているときなどは、小刀や石が飛んできたりもしたが、傷害を加えるような過激なこととはしなかった。多分、それはできなかったのだろう。

昭和十九年になると、南方での戦局は急速に悪化してきたが、まだまだ朝鮮としては影響が少なく日常生活にもさほどの変化がなかった。そんな中で私は咸興小学校を卒業して、咸興中学校に入學した。当時咸興には咸興中学校のほかに師範学校、咸南中学校、咸興商業学校、咸興工業学校、そして咸興農業学校などがあり、北朝鮮地方での教育の中心地であった。そして、全て日本人、朝鮮人の共学制をとっていた。

咸興中学校は、隣町の興南や西湖津の町の日本人子弟も入る学校であった。興南は、その昔は数軒の漁師が住んでいた零細な漁村であったが、その後東洋一と言われる窒素会社が進出してきて、

多数の日本人が働いていたので、そこからの中学生も多かった。

この咸興中学校に、二人の朝鮮人が入学試験を受けに来ていた。名前は確か古川君、高島君といったと思うが、定かではない。もちろん朝鮮名は知らない。

入試第二日目には、屋内体育館で身体検査が実施された。その際の出来事で、身体検査の最中に突然高島君が試験官に向かって大声で「パンツは洗濯のためにはいてきませんでした。ズボンを脱がなくてもよろしいですか？」としゃべった。緊張の最中でのこの一言で受験生一同は大爆笑となり、一時的に緊張がほぐれてしまった。

無事に入学試験も終えて私は合格したが、入学式で朝鮮人の古川君と高島君とも顔を合わせた。同級生となったが、格別な関心は持っていないかった。一学期の期末テストも終わって、その成績一覧表が学校の廊下に貼り出され、みんなは先を争って見に行った。なんとその一覧表には古川君、

高島君の二人の名前がトップに並んでいるではないか。私は焼け火箸で小突かれたようなショックを受けた。それ以来、日本人生徒のこの二人を見る目が急速に変わってきたし、それと共に朝鮮人を見る目にも変化が起きた。今、あの二人はどういう人生を送っているだろうかと思うこと切なるものがある。

私の中学生時代は、敗色の濃い中での防空壕を掘ったり、松根油用の松の根を一日に二、三本掘り上げさせられたり、さらには灌漑用堤の堤防造りのために、モッコによる土砂運搬をさせられたり、興南の日窒工場で貨車から石炭をおろしたりなどの、勤労働員の明け暮れであった。その合間を縫っての勉強だから、学力がつくはずはなかった。特に英語の時間には、英語の先生に向かって「敵国の国語を勉強して何の役に立つのか！」などと文句を言って、全く勉強をする気がなかった。先生方の応召や上級生が予科練など陸・海の学校に入るに際して、全校を挙げての激励送別会が

行われるようになった。こうしたことが重なるにつれて、やがては自分もという気持ちが高まり、いつの間にか覚悟ができていた。

私たち中学生を対象に加えた戦時動員体制が強化されたが、それと平行して朝鮮半島でもっともつと苛酷な動員体制が敷かれていた。

皇民化政策の浸透という政策のもとに、それまでは志願兵制度だった徴兵が、強制的徴兵制度に強化された。その上に、学生には学徒勤労働員が、また一般民衆には広く徴用制度が適用され、それが戦局の推移に伴ってだんだんとエスカレートしてきて、昭和二十年になると、道路上から直接に連れ去るといふ強制連行のようになってきた。個人の意思や人格は全く無視されてしまった。そして、それらの人々は前線における労働力の不足をカバーさせられたり、炭鉱や軍需工場へ送り込まれたりしていた。まさに「お国のため」という一言で、牛馬に等しい扱いを受けるようになった。

二 終戦前後の状況

昭和二十年八月十五日、その日も朝から松の根掘りの作業に向かった。その当時は、咸興市外の山に松根掘りに行くのが学徒動員の日課になっていた。

ところが現場に着いて、すぐに責任者の人から「今日の作業は午前中で終わりにして、正午までに学校に戻るように」という指示を受けた。みんな何事かと訝いぶかったが、午前だけで作業が終わることの方が嬉しくて、それ以上考えることはなかった。まさか戦争終結などということは、考えも及ばなかった。

正午前に学校に戻り、柔剣道場の前の校庭に全校生徒が整列した。校庭の中央に、一台のラジオが置かれていた。いつもの朝礼とは全く違う雰囲気、私たちも自然に緊張した面持ちになっていた。校長先生から「ただいまから、畏くも天皇陛下御自らのお言葉があるから一同よく聞くように」という訓辞があった。これはただごとではないと思った。

で、頭の中が白くなっていった。ラジオ放送が終わり、校長先生からの一言があったまではうつすらと覚えているが、それからどうしたかについては全然記憶がない。それぐらいにショックを受けたのだろう。二、三日後に学校に行つて、お互いにサインを交わして別れたことは覚えている。

朝鮮人部落のざわめきの中から起こる「マンセー！ マンセー！（万歳！ 万歳！）」の歓声かんせいが耳にこびりついた。明治四十三（一九一〇）年八月、日韓併合以来三十五年間続いた、日本による支配から解放された喜びの叫びであったろうが、私たちに蝉時雨のごとくに聞こえていた。

八月十五日を境として、私たち日本人は亡国の民となった。父は、当然に朝鮮人学校の校長としての立場も失脚し、住んでいた官舎からも退去しなければならなかった。銀行も閉鎖されて、必要な預金を引き出すことさえできなかった。生きるすべてを失った日本人の悲劇が始まり、苛酷な生活の日々となった。

二、三日前から、広島市に特殊爆弾が投下されて、広島市はほとんど全滅したそうだという風評が咸興にも流れていて、私たちの間でもそのことは知っていた。だから、きつと天皇陛下から直接に全国民に向けて、この重大な戦局を挙国一致して乗り切っていくように、という励ましのお言葉があるに違いないと思った。周囲の者もみんなそう思っていたと思う。頭を下げて、ラジオから流れるお声を一言も聞き逃すまいと耳をそばだてた。君が代が流れ、次いで「ただいまから天皇陛下のお言葉があります」というアナウンスが流れた。しばらく間を置いて、ラジオからは聞きなれない抑揚のある言葉が流れてきた。まさしく天皇陛下のお言葉だった。ラジオがよくないのか、雑音が多くてお言葉の内容はよく聞きとれなかった。ラジオ放送が終わると、校長先生が壇上に入り、涙を流しながら「戦争が終わった」と一言だけ言って、言葉を詰まらせていた。

私にとつても、思っていたことと正反対のこと

父の勤務していた沛東小学校には、昭和二十年の春になると本土決戦に備えるためであろうか、中国から日本軍が移転してきて、校舎の半分以上を兵舎として使用していた。そのため、小学生の授業も午前と午後の二部制となっていた。校庭には軍馬が繋がれていて、馬糞が山のように積まれていた。校舎裏の倉庫は糧秣庫となり、その隣には臨時の炊事棟も設けられていた。

ここに駐屯した部隊は衛生隊で、その隊長は我が家の座敷住まいとなった。聞くところによると、慈恵医大出身の医者で大尉だったと思う。朝鮮人部落の真ん中にいた私たち家族だったが、八月十五日の敗戦を迎えても、この時点では日本軍の部隊がまだ校舎にいたので不安がなかった。

終戦の日から四、五日経ったころと思うが、校前の国道を異様な格好をしたソ連兵を満載したソ連軍のトラックが十数台、土煙をあげながら咸興府に向かっていた。初めて見るソ連兵、その中には体の大きいがつしりした格好の女性兵士も多

数見受けられた。部落の朝鮮人は総出で沿道に並び、口々に「マンセー！ マンセー！」と叫びながら歓迎していた。私たち日本人は、その後の方で黙ったままで眺めていた。

うわさによると、最初に咸興府に進駐してきたソ連兵は囚人兵が主体で編成されているとのこと、これからの咸興府市内の治安がどうなるのかと思ひ、恐怖心かられてしまった。

それから一兩日のうちには、頼りにしていた日本軍も何の抵抗をすることもなく整然として武装解除されて、知らぬ間に校舎からいなくなってしまう。起居していた校舎内や、軍馬が繋がれていた校庭の隅もきれいに整理されていた。その人たちが咸興からシベリアに連行されたことは、私が帰国してから知った。この人たちと一度でも会ってみたいと思うことがあるが、安否は知る由もない。

今思い起こすことだが、終戦の次の日のこと、衛生隊長が父に向かって「トラック一台に兵隊を

かねてからこの事態のくることは覚悟していて準備をしていたが、追われるようにして出てゆくことには、やはり悔しさと寂しさとが交差して、複雑な気持ちであった。

朝鮮人部落から雇った牛車五台に布団や当座必要な衣類、それに食料品、最低限必要な家財道具を積んで、咸興府内軍営通りにある平松京染店の二階一間に間借りすることとなった。今までの比較的ゆったりとした官舎の生活から、両親、兄弟が一部屋に詰め込まれる窮屈な生活が始まった。

昭和二十一年六月に日本に引揚げるとの間、国家という後盾を失った亡国の民の暮らしが、いかに悲惨であり、いかに屈辱に満ちたものであったか、それは全く筆舌に尽くし難いものである。願わくば、未来永劫、戦争という悪魔をこの世から駆逐し、平和の傘が全世界を覆うようになってもらいたいものだ。

二人付けるから、一日も早くここから出発して南朝鮮に逃げてはどうか？」と提案してきたという話があり、恐怖のどん底にあった私たち家族はその話に乗るべきだと思っていた。だが父は「私は沛東小学校の校長として、学校の引継ぎをきちんとしなければならぬ責任があるから」と言っただけで断り、この局面から逃げようとはしなかった。冷静になって考えてみると、隊長の提言に乗ってトラックに護衛兵までつけて南朝鮮に向かっても、どこまで安全に逃げる事ができたのだろうか。北朝鮮におけるいろいろな情勢を判断するに、簡単には南下できないだろうと思った。むしろ逆に、南下したために計り知れない多くの苦難があったかもしれない。父の判断の方が正しかったのではないかと思ひ、今は亡き父に敬意を表している。

三 引揚げに向かつて

やがて父は、沛東小学校の引渡しを無事に終え、私たち家族は校長官舎からの退居を求められた。

青春の追憶

茨城県 田谷 榮 近

一 生い立ちから終戦まで

生い立ち

父は、東京で電球を作る零細な町工場で働いていたが、私が二歳半のときに亡くなった。母は実家に戻り、私は茨城の祖父母に預けられたが、一年後には母は再婚してしまった。祖父は土木作業員の監督をしていて、祖母は小さな駄菓子屋を開いて果物や野菜も商っていた。

昭和九（一九三四）年に地元の小学校に入学したが、三年生の一学期までは目立たない存在であった。二学期になって、横須賀海兵団を短期現役で除隊した木村正一訓導が赴任してきて、私たちの組の担任となった。

当時の世情は不景気のどん底で貧富の差が甚だしかったが、木村訓導はどの児童にも公平に接し